

さんしゃ Zapping

Vol. 35 No. 1 (通巻 197号)

2020年7月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsume.ac.jp

<http://www.ritsume.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

[目 次]

<新任紹介>

着任のご挨拶 御旅屋 達 p. 2

着任のご挨拶 柳原 恵 p. 5

<自著紹介>

『メディア論の地層
—1970 大阪万博から 2020 東京五輪まで』 飯田 豊 p. 7

『子どもの貧困と「ケアする学校」づくり
—カリキュラム・学習環境・地域との連携から考える』 柏木 智子 p. 11

<エッセイ>

Beyond コロナのその先に 崎山 治男 p. 14

< 新任紹介 >

着任のご挨拶

おたや さとし
御旅屋 達



ちんご挨拶できておりません。こうして文書を通じて着任のご挨拶をする機会をいただけたことを嬉しく思っています。

私は兵庫県出身ではありますが、近畿圏での生活は、大学進学を機に上京して以来、約20年ぶりになります。大学生の頃は進学・研究職という進路については全く考えておらず、民間企業への就職を目指していました。しかし当時はいわゆる就職氷河期の真っ只中、ほとんど内定を得ることのできなかった私は、新卒カードを維持するため、恥ずかしながら半ばモラトリアムのような意識で修士課程に進学しました。ここで研究の面白さには気づきつつも、修了後は（予定通り）とある民間企業に就職しましたが、そこでお世辞にもまともとはいえない労働環境を経験したことが、後述する研究上の問題関心にも強く影響を与えているように思います。退職後、1年間のフリーター生活を経て改めて進学し直し、東京大学社会科学研究所、山口学芸大

2020年4月より産業社会学部子ども社会専攻に着任しました、御旅屋達（おたやさとし）と申します。専攻コア科目の「子どもと社会」を中心に、「現代教育社会論」などを担当しています。今年は新型コロナウイルスの流行下での着任となり、まだ学生に会えていないだけでなく、ほとんどの先生方、職員の方々ともき

学に勤めたのち、この4月より産業社会学部にお世話になっています。

研究活動については、就労や生活に困難を抱えた若者への支援、いわゆる「若者支援」についての研究をしてきました。この領域は実践が常に先行し、政策や研究がその後ろを追いかけているという印象があります。私もまた、現場における実践やその背後にある理念、当事者である若者の相互行為や意識を記述することを大切にしてきました。大学院生時代に首都圏の若者支援現場においてスタッフとして活動しながら参与観察を行って以来、こうした研究のスタイルを基盤としてきました。ここ数年は転居を繰り返してきたこともあり、一つのフィールドに関わり続けることはなかなかできずにいましたが、これからは京都に腰を据えて実践との協働も模索していきたいと考えているところです。

若者支援の中でも注目してきたのが「居場所」と呼ばれる支援形態です。「居場所」という概念は1990年代から子ども・若者をめぐる社会問題として、その欠落が語られるようになり、2000年代には支援形態を示す代名詞としての用法が定着しました。本来、「人のいるところ」という座標上の位置を表す意味でしかなかったはずのこの言葉が、どのように、対人関係上の欠落を表す言葉になり、

また、その欠落が支援の対象となってきた過程について考察したり、その現場が利用者の社会参加やアイデンティティにいかなる意味を持っているか、といったことについて検討したりしてきました。

また、若者支援という場には、その対象が「若者」であるがゆえに、福祉的なものと教育的なものが混ざりあった独特のマインドが流通しています。今後は、こうした教育と福祉の相克と共在がどのように現場での実践を可能にし、限界を生み出しているのか、というテーマにも当たっていきたいと考えているところです。

教育面では、産業社会学部の学際性の強さを意識した教育を行なっていきたいと考えています。学生たちにとって、様々な専門性を持った先生方が多く在籍されているこの環境での学生生活は、自身の関心や疑問、違和感などを相対化し、それらに言葉を与えることのできる、またとない機会となると思います。私自身にとっても、幅広い知識や視角を身につけた学生たちとの対話はチャレンジでもありますし、刺激的な体験になるだろうと期待しています。異なった知を獲得してきた学生たちが相互に刺激を受け合うような工夫を行なっていきたいと考えていますし、私自身もまた産業社会学部の幅広い

知の一端を担うことができるよう励んでいきたいと思えます。同時に様々な社会事象の解明に取り組まれている先生方と研究交流できることも、とても楽しみにしています。

ご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

やなぎわら めぐみ
柳原 恵



2020年4月より現代社会専攻に着任いたしました柳原恵（やなぎわらめぐみ）と申します。今年度は、教養科目「ジェンダーとダイバーシティ」ほか、「比較家族論」、「社会調査士Ⅰ」、「プロジェクトスタディ」、「基礎演習」を担当しております。

専門はジェンダー研究、ジェンダー史で、なかでも地域女性史に軸足を置いた研究をしております。大学院では戦後の東北・岩手におけ

る女性たちの歩みに着目し、当地に生まれたフェミニズムについての研究を行い、『〈化外〉のフェミニズムー岩手・麗ら舎読書会の〈おなご〉たち』（ドメス出版、2018）という本にまとめました。従来、日本女性運動史研究においては、東京など都市部の運動が主に取り上げられてきましたが、そういった都市部のフェミニズムが立脚するのは「都市部中流階級」の女性の経験に限局されてきたことを指摘し、ジェンダーの視点に加えて、近代化を通じて「周辺（化外）」として構築されてきた東北という地域の視点、そして農村（農民）という社会階層の視点から、「日本女性」の経験してきた「近代」および日本のフェミニズムの多様性を考察しました。

また岩手県立大学と盛岡の地域女性史サークルの協働研究「歴史に学ぶ『女性と復興』～昭和三陸大津波と家族、共同体～」（2012～2014）にも参画し、岩手県三陸沿岸町村にて昭和三陸大津波（1933）、チリ津波（1960）、そして東日本大震災（2011）

という3度の大地震を経験した高齢女性たちへの聞き取り調査を実施しました。このように、もともと「化外（東北）」の研究をしてきた私が、「化内（京都）」の立命館大学にご縁をいただくのも不思議なものだと思っております。

私自身、生まれも育ちも岩手県で、大学進学を機に関東へ生活拠点を移しました。修士課程修了後、都内の民間企業での勤務を経て博士課程へ進学、博士論文提出後に長男が生まれ、その後はしばらく育児に専念していました。2016年、天文学研究者の夫の仕事の都合により、1歳半の息子と猫2匹を連れて家族で南米チリの首都サンティアゴに引っ越ししました。言葉もわからない異国の地、夫は毎月の出張でチリ北部標高5,000メートルのアタカマ砂漠の中、何かあっても頼れる実家や親戚は地球の裏側という、ある意味で“究極のワンオペ育児”を経験しました。

チリでの生活を通じてラテンアメリカの女性をとりまく状況にも関心を持ちはじめたことをきっかけに、現在はチリも新たな研究フィールドとしています。チリの先住民マプーチェの女性によるフェミニズムに着

目し、ジェンダー、エスニシティ、階層が絡み合う複合差別の状況に置かれた彼女らの運動を、ポストコロニアル・フェミニズムの観点、ジェンダーとエスニシティの視点から調査研究しています。

着任後のこの2ヶ月あまり、教員としての教育経験が浅いことに加え、コロナ禍による突然のオンライン授業化で大変戸惑いましたが、ご親切に相談に乗ってくださった産社の先生方、事務の方々のサポートのおかげで、なんとか乗り切ってまいりました。

関西出身者が多い立命館の学生さんたちは、私がこれまで接してきた東北や関東の大学の学生さんに比べ、積極的に自分の考えや要望を発言すると感じています（ひょっとしたらオンライン化でテキストベースのコミュニケーション機会が多いことによる影響かもしれませんが）。学生さんたちとの対話からも大いに学びながら、自身の研究を教育へも活かし、微力ながら立命館大学へ貢献できるよう、誠心誠意努力する所存です。引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

< 自著紹介 >

飯田 豊 著

『メディア論の地層

—1970 大阪万博から 2020 東京五輪まで』(勁草書房)

飯田 豊



筆者にとって本書は、『テレビが見世物だったころ —初期テレビジョンの考古学』(青弓社、2016年)に続く二冊目の単著であり、初めての論文集である。前著に引き続いて、本書の刊行にあたっては、産業社会学会の学術図書出版助成を受け、学会の関係各位にはひとかたならぬお力添えをいただいた。まずは深く謝意を表したい。

各章のタイトルと初出の一覧を以下に示す(本書に再録するにさいして、いずれも大幅に改稿しており、改題しているものもある)。

第1章 「マクルーハン、環境芸術、大阪万博 —一九六〇年代日本の美術評論におけるマクルーハン受容」『立命館産業社会論集』48巻4号、2013年

第2章 「メディアのなかの考現学 —アカデミズムとジャーナリズム、エンターテインメントの狭間で」『現代思想』2019年7月号

- 第3章 「インターネット前夜 —情報化の〈触媒〉としての都市」大澤
聡編著『1990年代論』河出ブックス、2017年
- 第4章 「放送文化の民俗学 —六輔さすらいの旅、その射程」『ユリイ
カ』2016年10月号
- 第5章 「送り手のメディア・リテラシー —二〇〇〇年代の到達点、一
〇年代以降の課題と展望」浪田陽子・柳澤伸司・福間良明
編著『メディア・リテラシーの諸相 —表象・システム・ジ
ャーナリズム』ミネルヴァ書房、2016年
- 第6章 「ポストテレビ、ハラズメント、リテラシー —地上波テレビと
インターネット動画の関係史」『現代ビジネス』講談社、2018
年
- 第7章 「大阪万博以後 —メディア・イベントの現代史に向けて」飯田
豊・立石祥子編著『現代メディア・イベント論 —パブリッ
ク・ビューイングからゲーム実況まで』勁草書房、2017年
- 第8章 「メディア・イベントの可能態 —藤幡正樹《Light on the Net》
(一九九六年)を解説する」『情報科学芸術大学院大学紀要』
第9巻、2018年
- 第9章 「遍在するスクリーンが媒介する出来事 —メディア・イベント
研究を補助線に」光岡寿郎・大久保遼編『スクリーン・ス
タディーズ —デジタル時代の映像／メディア経験』東京大
学出版会、2019年
- 第10章 「DIYとしての自主放送——初期CATVの考古学」神野由紀・
辻泉・飯田豊編著『趣味とジェンダー —〈手づくり〉と〈自
作〉の近代』青弓社、2019年
- 第11章 「「ポストメディア」の考古学 —ミニFMをめぐる思想と実践
を手掛かりに」岡本健・松井広志編『ポスト情報メディア
論』ナカニシヤ出版、2018年
- 第12章 「災害ユートピアとしてのパブリック・アクセス」コンピュー
ターテクノロジー編集部編『IT時代の震災と核被害』イン
プレス選書、2011年

本書に収録している文章のほとんどは、前著の刊行から4年のあいだに執筆したものだが、第1章「マクルーハン、環境芸術、大阪万博」は、立命館大学に着任して1年目に、『立命館産業社会論集』に投稿した論文である。大学図書館の所蔵資料の充実ぶりに感激し、授業や会議の合間に書庫にこもって資料を探索して、一気に書き上げた記憶がある。2020年度の春学期は、新型コロナウイルスの感染拡大によってキャンパス入構制限がとられており、大学図書館の利用もままならないことを踏まえると、隔世の感を抱かざるを得ない。

おかげさまでこの論文は、メディア論や社会学の研究者ばかりでなく、美術史や美術批評などを専門にしている方々、あるいは美術家や学芸員の方々にも広く読まれ、研究の幅が大きく広がるきっかけになった。たとえば、大阪万博に関する共同研究を組織したり、メディア・アートや建築に関する論文を書いたりする機会を得た。

また、こうした研究対象に対するメディア論的な関心のありようを説明してみようと、「メディア・イベント」という(いささか使い古された)概念を補助線として、『立命館産業社会論集』に2015年、「複合メディア環境における「メディア・イベント」概念の射程 —〈仮設文化〉の人類学

に向けて」(立石祥子さんと共著)と題する論文を投稿した。これが『現代メディア・イベント論 —パブリック・ビューイングからゲーム実況まで』(共編著、勁草書房、2017年)の制作につながっている。

ここ数年、投げられた球をそのつど打ち返すような、行きあたりばったりの執筆活動を続けていたが、日本におけるメディア論的思考の歴史的地層に関心を向けている点で、いずれの仕事にもつながりがあることに気づくようになった。2018年度から放送大学で、水越伸先生(東京大学)、劉雪雁先生(関西大学)と一緒に「メディア論」の講義を担当することになり、メディア論の系譜を自分なりに整理し直す作業に取り組んでいたことも、本書を制作する動機づけになった。

それにしても、副題に「2020 東京五輪」という言葉を入れたのは、ちょっとした便乗商法だったわけで、かなり小っ恥ずかしい空振りであった。メディア史研究者の佐藤卓己先生(京都大学)が、『週刊読書人』5月15日号に寄せてくださった本書の書評は、次のような文章で締めくくられている。

一見すると雑多な内容を扱っているように見えるが、四つの切り口でメディア論の豊かな可能性を鮮やかに提示している。ち

なみに、サブタイトルは「1970 大阪万博から 2020 東京五輪まで」だが、本稿執筆の段階で「2020 東京五輪」開催の雲行きは怪しくなっている。こうした未来の不透明性も、「敗者」に見えるものごとの文化的な文脈」すなわちメディア考古学の知が求められる理由なのだろう。

雲行きが怪しくなってきたのは、来たる「2025 大阪・関西万博」も同じだ。今年はドバイ万博を視察する

予定だったが、東京五輪と同じく来年に延期となった。それでも開催に漕ぎ着けることができるかどうか疑わしいし、日本からの渡航はハードルが高そうだ。ドバイ万博のあり方は、大阪・関西万博にも大きな影響を与えるだろう。

「2020 東京五輪まで」と題した本書の刊行によって、メディア・イベント研究は一区切りと思っていたが、そういうわけにもいかなくなっていて、これから5年間の過ごし方を見直しつつある。



柏木 智子 著

『子どもの貧困と「ケアする学校」づくり
ーカリキュラム・学習環境・地域との連携から考える』(明石書店)



明石書店（2020年2月28日発行）

本書の出版にあたり、2019年度立命館大学産業社会学会学術図書出版助成をいただきました。学会および皆様に深く感謝の意を表したいと思います。

本書は、子どもの貧困に立ち向かう学校づくりについて、教師の中心的な業務としての学習指導に着目して論じたものである。近年、子どもの貧困が政策的アジェンダとなり、学校は貧困問題に取り組むための中心的拠点として位置づけられている。しかしながら、学校は子どもの貧困にうまく向き合えず、困難を抱える

柏木 智子

子どもを排除してしまう側面を有している点がこれまでの多くの研究から明らかにされてきた。そのため、学校制度の廃止を提案する脱学校論や学校に期待をしないで社会を変えていくやり方が議論されたり、教師以外の多様な人材による学校運営で学校を変えていこうとする施策が提示されたりしてきた。一方で、これまでの一部の研究では、民主主義や市民社会の形成に寄与しうる学校の姿と、それを担う教師の役割についても明らかにされてきた。本書では、こうした学校の価値に目を向け、学校をよりよくするためにどうすればいいのかを検討することとした。具体的には、貧困に端を発するさまざまな困難を抱える子どもに対して、学校・教師は何ができるのか、あるいは、何をすべきなのかを問い、子どもたちの「学校生活への包摂」がいかにして可能になるのかを論じた。それによって、「排除型社会における教育の機能不全」と指摘される状況を少しでも解消し、包摂型社会の形成や公正な社会の創造への学校

の貢献を示すこととした。

本書は、全 10 章からなる。理論編としての第 1 章では、子どもの貧困の理論と実態の検討を行い、第 2 章では、子どもの貧困にうまく向き合えなかったこれまでの日本の学校の課題を提示し、第 3 章では、子どもの貧困に立ち向かうために求められる教育構想についての理論的視座を定めた。これを「ケアする学校」として提示し、その具体的なあり方について、続く事例編の第 4～8 章で詳述した。事例編では、2 校の小学校、1 校の中学校でのフィールドワークをもとに、「ケアする学校」づくりの具体的方法について、カリキュラム・学習環境・地域との連携に焦点をあてて析出した。結論編の第 9 章では「ケアする学校」の諸要件の整理を、第 10 章では「ケアする学校」の普及に向けての提案を行った。

本書の教育的見地からの問題意識は、子どもの排除を生み出す学校文化にあり、その責を教師に問うというよりも、日本の学校の構造から見出そうとするところにある。そうした観点から分析すると、学校という組織に共通する排除を生み出す仕組みとして、子どもたちの水面下での競争と序列化を伴って維持・強化される、同質性の前提にもとづく一斉体制・一斉主義の学校・学級規範を指摘することができる。この規範の

根底には、教師が子ども間の差異を目立たせずに「みんな同じく」処遇することを原則とする、あるいはそれを最善と見なすことを促す「面の平等」観がある。この平等観の転換に迫るために、アマルティア・センの議論を応用すると、差異を前提に異なる処遇を重視する教育に実質的な教育機会の平等が見いだせる。この教師に求められる異なる処遇には、差異に応じて二種類のものがある。それは、あってはならない差異を埋めるための異なる処遇と、あってもよい差異を認めるための異なる処遇であり、前者は子どもの最低限の学校生活を保障するものであり、後者は子どもの多様性を尊重するものである。これらはどちらも子どものニーズにもとづき、ケアの倫理に則ったものである。

事例分析から、上記の異なる処遇は次のような活動として実施されていた。まず、学習に必要な学習・生活用品を整えることができないすべての子どもたちにそれらを貸与・供与する仕組みと、登校支援や宿題支援や洗濯の支援などを通じて、学校生活で求められる学習習慣やルールあるいは生活習慣を身につけられる仕組みを整備することである。次に、学習のタイミングや学びへの関わり方を子ども自身が選べるようにしたり、子どもの内なる声を表明し、他

者と異なる思いや考えをもてるように促したりする学習活動を行うことである。加えて、ケアとそれによる人権保障について学ぶ地域学習が並行して実施されていた。これらを通じて、子どもたちは自己責任論に流されずに社会構造に問題を見出す批判的思考をもち、自他の人権侵害の状況を見極め、そこからニーズを捉えて自身と仲間・他者をケアする能力を養いつつあることが見出された。そして、貧困に負けない力を身につけられるであろうことが検討された。一方で、教職員間でのケアを促進す

る、ケアリング・コミュニティの形成の重要性も見出された。

こうした「ケアする学校」づくりを行うためには、教育行政による人・モノ・金に関する資源配分の変更、カリキュラム・マネジメントにおける学校裁量権の拡大等が必要となる。

現在は、本書で見出された知見をもとに、現状況下での教育課題に関する基礎的研究に取り組み、すべての子どもの生を保障するための教育経営のあり方について研究を進めつつある。



<エッセイ>

Beyond コロナのその先に

崎山 治男

コロナと共に慌ただしく学期が始まった。卒業式中止の余韻も冷めない中、緊急事態宣言に伴う全校休講、そして慌ただしくウェブ授業、といったことがらが妙に昔のことのようを感じる。そのぐらい、私や大学、そしてそれを取り巻く社会が変わったからなのだろうか。オンライン会議、授業やビデオ録画、そして zoom。一年前には想像もしていなかったことが「新しい日常」として、いつの間にか日々の生活の中に組み込まれてしまっている。

交通通信手段の発展が人々の時間・空間、そして社会意識の変化を生んできたのは世の常であったと社会学やメディア史は説く。自分自身の経験を振り返ってみても固定電話からケータイ、インターネットといったことからそれは実感できる。

この with コロナ、after コロナの社会のあり方を判断するのはいささか早計だとは思ふ。しかし、これがグローバルな情報資本主義の退行へと向かう方向なのか、あるいはグローバルな情報資本主義が現在の国民国家・福祉国家からその富を吸い上げる最後のプロセスなのか。はたまた、ヒトや社会の本質は結

局の所情報であり、それを鮮明化しただけなのか、あるいは情報以外の外的要素への弱さを表したもののなのか、さまざまな考えが頭をよぎる。その中で日々の授業や研究、そして生活をこなす数ヶ月であり、今後もそうなのだろう。

ただ、そうした日常の中で感じるのは、人々の、そして社会の「間」だ。もちろん、いわゆるソーシャル・ディスタンスというコロナ感染拡大を避けるための物理的な間もある。コロナ巣ごもりの中、買い物や所用を足しに外出する際に人々との物理的な間を意識的に気にかけるというのも初めての経験であるし、その際にコロナへの意識差でいらだいたり安心を感じたりもする。教員という立場から、職場という点ではいやおうなく大学との物理的なソーシャル・ディスタンスをとっている。また、その点で職員の方々や執行部の先生方、私生活では妻の通勤になんとか後ろめたさを感じたりもする。

だが、それ以上に感じるのがいわば意識面や関係性での間だ。ウェブ講義の録画をしていて改めて気づいたのだが、普段 90 分の講義を行っている内容が不思議と 60 分に収まってしまう。全学の

ウェブ講義での方針である、必ずしも90分全てを費やさずに数十分程度で複数パートに分けて収めることを特段意識しているわけでもなく、また授業そのものの内容や話すネタは例年と変わらずにもかかわらず。また、zoomでのライブ双方向授業をゼミで行っている際にも、zoomに一斉集合、時間が来たら一斉解散という形で前後の間がない。できるだけそのような間を設けようと雑談やゲームの時間を設けてはいるが、それでもいわゆるゼミらしさがなかなか感じられない。学生にしても同じようであり、特にzoom飲み会などで強く感じる。この間の正体は何なのだろうか。自問自答しながら、なんとかそれらしさを保とうとはしているのだが。

Before コロナと after コロナの狭間で、before コロナの頃の関係、それも単に対面でコトバを交わすというだけでなく、しぐさや人となり、あるいは空気や雰囲気感覚に頼りながら手探りで間の感覚を思い出したり、あるいはそれらへの記憶を頼りにしたりしながら新しい間を創ろうとしているのが私の現在ではある。Before コロナの関係性があった方がなんとなく安心感、信頼感があり、それが無い場合には不安があったりもする。そして、間のない録画やゼミは効率的かもしれないがいささかの心もとなさ、伝わっているかどうかの逡巡を覚えたりもしている。コンテンツとしては同じかもしれない。だが、この感覚は何なのだろうか。

もちろん、交通通信手段の変化のただ中にあり、学生等にくらべて少し古い世代の社会意識であると断じるのは簡単だし、実際にそうなのだろう。After コロナの世界に待ち受けているであろう間も、効率性という面では悪くはないし、恐らくはそのような間が形成され、そこに慣れてもいくのだろう。ただ、かつての対面での間、あるいは溜めを創り、提供するのが教育、そして大学という場であるようにも感じている。

講義での90分と録画での60分との違いの中での間、ゼミの前後や最中での時間の間は、もちろんいわゆる脱線話や雑談が多くを占めていたのだろう。だが、それは必ずしも無駄な時間ではなく、いわば考えをまとめる思考の間であったり、人間関係を幅広くするための想いの間であったりもするように、振り返って考えてもいる。

この間の正体は何なのか、改めてまとめてみようとしてもなかなか現時点では理論化・言語化はできないでいる。恐らくは with コロナの後にある beyond コロナのその先に見えてくるものなのだろう。

まあ、下手の考え休むに似たり。見る前に飛べ、だ。まずは with コロナの中で始まるであろう秋学期が目の前に待っている。間や溜めをどう新しく創っていきけるのか、自戒と好奇心とで取り組んでいきたい。

< 編集後記 >

本年度はコロナ禍の影響もあり、さんしゃ Zapping 通巻 197 号を 2020 年 5 月に発行することができませんでした。発行をお待ちいただいていた皆様には、たいへんご迷惑をおかけいたしました。本年度は、7 月、12 月、3 月の 3 回発行予定です。

誌面をお借りして、お詫び申し上げます。

2020 年 7 月 産業社会学部共同研究室

Zapping 原稿募集

研究会・学会報告など教育・研究に関するあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろいろな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500 字～2,000 字程度でお書きください。

原稿は s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付してください。